

# 健やかな環境をとり戻すために

## ——ダイオキシンのない社会に

石 沢 春 美

日本にダイオキシン汚染が拡がって深刻な状況になっていることは、いろいろと報道されていますので皆さんも御存じだと思います。このダイオキシン汚染という問題に直面しまして、ダイオキシン汚染は毒性がきわめて強く、次世代にも影響を残すものだということが、私の心にしっかりと留まりました。私は3人の子供の母親ですから、ダイオキシンが次世代の子供たちの生きていく未来まで脅かし、やがては地球環境の生態系まで狂わせていくほどの毒性を持っているというのは大変なことだという危機感が強く、それが私がダイオキシンに関わったきっかけです。大量生産社会が進んだ為に起きた大量廃棄とその廃棄物の焼却が、日本のダイオキシン汚染の原因の80%を占めると言われています。そこで廃棄物の削減のためにできることは何かという問題をずっと追求してすごしてきました。

ダイオキシン汚染のより深刻な状況を知ったのは、1998年2月14日にNHKで西山浩監督が製作された「ベトナムに生まれて」という番組を見た時で、私はこの番組に強い衝撃を受けました。この実写フィルムは現在のベトナムを映していたものでした。ベトナム戦争の枯葉剤に含まれていたダイオキシンの影響で、10年後に二重胎児のベトちゃんドクちゃんが生まれたことは私も知っていましたが、今なお胎児毒性が続いている事実に非常に衝撃を受けました。これは現在日本に拡がるダイオキシン汚染と同じであり、ダイオキシン汚染というのは予想以上に深刻なのではないかと思い、その「ベトナムに生まれて」を私たちの住む町で学習会に使って、ダイオキシンの毒性について広めております。このフィルムには、ベトナムでは今なお無脳児、無眼児、口蓋裂、二重胎児が生まれていたり、カルシウム代謝の攪乱のために足で歩けない子供さんとか手のないお子さんがいることを撮影していますので、実写であるということにより説得力があると思います。

そういうことから日本のダイオキシン汚染を考えると、カネミ油症が思い出されました。カネミ油症はジベンゾフランというダイオキシン類による被害ですが、現在も続いているベトナムの被害から、日本のカネミ油症はどうなっているのかということを疑問に思いました。そう思い過ぎておりましたところに、「止めようダイオキシン！ 関東ネットワーク」からカネミ油症の調査に行きませんかという呼びかけを受けました。それはさきほどここで御講演下さ

いました原田正純先生を代表とする調査団でした。私も原田先生にはぜひ一度お目にかかりたいと思っておりましたので、それに調査に行きたい思いがまず一番先にありましたので、この調査に参加致しました。

2000年の3月と8月の2回、調査に行つてまいりました。3月の時には福岡と、長崎の五島列島に行きました。先に福岡県の被害者の方たちにお会いしましたが、そこでカネミ油症の被害者の方たちに実際にお会いして、私は大変驚きました。カネミ油症事件というのは、もう32年前になりますが、1968年に農林省推薦のエコロジー商品としてカネミライスオイルという食用油が売り出されて、この油の製造の脱臭行程に使用されていたPCBが、蛇管の中にピンホール、つまり小さな穴があいていて、そこからPCBが漏れて、そして熱変成によってポリ塩化ジベンゾフラン、コプラナーPCBとなり、これが溜まった油の中に混じってしまった事件でした。これを食した西日本一帯の人たちに、奇病が大量発生してしまったわけです。最初はクロルアクネ(塩素座そう)がたくさん出たり、目やにが止まらないといった症状で、私もせいぜいその程度の情報しか知りませんでした。裁判が起きていることぐらいは知っていましたが、その時はポリ塩化ジベンゾフラン、コプラナーPCBに熱変成して、それが油症の原因だったということも知りませんでした。そのことは10数年前に本で読んでではじめて知りました。

調査に行つてみて非常に驚いたのは、最初にお会いした被害者の方はまだ目から油が出ていたのです。ダイオキシン類は脂肪に溜まるということがここではっきりと判りました。目の淵から油がにじんでいて、片目は失明しているのです。32年後の現在もなおこんな被害が続いていることに、私は非常に驚きました。その方に今までの経緯をお聞きしましたが、身体のあらゆるところから油が出たとおっしゃっていました。トイレに行くときまわりが油だらけになってしまって、気持ちが悪くてお風呂に入っても、洗っても洗っても身体の油がとれなかったそうです。今も油症の苦しみを抱えてひっそりと生きておられました。この方の御主人は若くして油症で亡くなったそうですが、油症だと認定はされていないそうです。世間から隠れて一人でひっそりと生きておられる点は、さきほど原田先生がお話になった水俣病の方たちと同じでした。この調査の時は6人の方に集まっていたいたんですが、皆さん御主人を早く亡くされていて、その後は一人でひっそりと病気をかかえながら生きていらしたんです。私は写真を1枚撮らせてほしいとお願いしましたが、油症になってからは写真を撮らないとおっしゃっていました。

それから五島列島にむかい、その時は原田先生も御一緒に、五島列島の福江島に渡りました。被害地の玉之浦までは、福江空港からタクシーで、非常に入り組んだ入り江の道をずっと渡って行くんです。五島列島は140の島から成っていますが、その西のはずれの小さな島のこんな辺鄙な所になぜ油症被害をもたらすような油が渡ってきたのかしらと、着いた時一番初めに思いました。

被害者の方たちには前もって調査のことはお知らせしてありましたので、皆さん集まって下さったんですが、強い人間不信と云いますか、「日本の国も日本人も信じない」という衝撃的

な言葉を最初に言われました。「私達は日本人を信じない、誰も助けてくれなかった」とおっしゃって、私達が油症の被害についてお聞きしても、全く口を閉ざしたままでしたが、原田先生が30分位ずつ皆さんをととても丁寧に診察なさった後は、少しずつ心を開いて下さって、私たちが「大変でしたね、今までどうでしたか。」とうかがうと、徐々に徐々に話をしてくれました。油症の発生した当時、玉之浦ではコーラルベビーと呼ばれる黒い赤ちゃんが生まれたんです。私たちはコーラルベビーは稀に生まれるのかと思っていたんですが、実は一人のお母さんが二人も三人も産んでいるんです。ベトナムにもあった多指症の赤ちゃんも生まれていましたし、カルシウム代謝異常で歯が一瞬に折れてしまった赤ちゃんがいたという話も聞きました。自分の赤ちゃんはもう歯がはえて生まれてきたという方もいらっしゃいました。その他にも、一瞬で毛が抜けてしまった方や、クロルアクネが今も残っている方もいました。クロルアクネと言いましても、果肉をぶつけたみたいに湿疹の上にまた湿疹ができて、もう苦しくて苦しくて、自分でナイフで傷を入れて膿を出したっておっしゃるんです。その上ここは島のはずれで、近くには診療所が一軒しかなくて、福江や長崎まで行かなくては病院がないので遠くで行かずに、そのまま苦しみ抜いたそうです。年に1回の検診はあったそうですが、ありきたちの検診で、症状を訴えても手の使いすぎ、足の使いすぎ、目の使いすぎで片付けられてしまって、なにも治療してもらえなかったとおっしゃっていました。しかも、先程の原田先生のお話の中にも賠償金のことがありましたけれど、その方たちは、「もう私たちはお金のことは全然言えないんだ。その当時20万円で片付けられてしまった。」とおっしゃるんです。そういう方がたくさんいたんです。どうしてこういう方たちを社会は置き去りにしたんだろうと、私は強く思いました。

翌日奈留島という所に船でむかいましたが、そこでもまた衝撃を受けました。そこには沢山のガンを抱えたり、手足が曲がったりしている方がいたんです。また、歩いていると一瞬目が見えなくなって転んだり、そしてちょっと歩くとまた見えたり、また見えなくなったりというのが続いて、とうとう両眼が見えなくなった人もいるという話です。また神経をやられて音を聞くのも非常に苦痛で、家の中に籠りっさりになっている人もいました。コーラルベビーを産んだあるお母さんは、赤ちゃんがチョコレート色をしてドロツとした感じで生まれてきたそうですが、それがあまりに衝撃的だったので神経をやられてしまって、味覚を失い全然味がわからなくなってしまったというのです。その方は御主人に助けられながらずっと生活をしているということでした。その他にも、お子さんがずっと発熱を繰り返して、その当時生まれたお子さんですからもう今では32歳なんですが、入退院を繰り返して、最近になって精巣減少症っていう病名がついたという方がいました。精巣が減っていくわけですから子供はできないわけです。結婚はしていないそうですが。カネミ倉庫は被害者に治療費を払うことになっているんですが、この方の場合「油症が原因じゃないか」と言ったら「それは関係ない」と言われたそうです。そこで私が「生殖毒性なので絶対関係あります」とカネミ倉庫の方に言うと「じゃあ請求してください」と言っていました。

私たちのところに来てくれた人たちはほんの一部で、まだまだ家に寝たきりの方もいらっしゃるわけです。原田先生も「来れない方が問題ですね」とおっしゃっていましたし、私もそう思いました。それで原田先生が帰られた翌日、私たちにはもう1日あったので、今度は寝たきりの方を訪ねてみました。その方の背中にはとても大きい火傷の痕がたくさんあって、10年間位火のように身体が熱かったとおっしゃっていました。全身が火傷のような状態で苦しんで、現在は少し軽くなったそうですが、今でも皮膚が膿んで、白い膿が出ているんです。腰のところに油房というところがあって、下においた油がそこに溜まるということで、ドイツ製の電動吸入機で溜まったものを吸入して出さないと身体が重くていられないのだそうです。この機械にはガラスのような半球がついているんですが、それを皮膚にあてて電気を入れると、ぎゅゅっと皮膚を吸い上げて、白い油がびゅうっと出るんです。私はそのことを『今なぜカネミ油症か』の本の中に書いています。

3月はそれで帰ってきましたが、6月6日に有楽町フォーラムで国立科学研究所のシンポジウムがあって、私はぜひカネミ油症のことを訴えたいと思って行ってみました。「会場から発言できますか」と聞いたら「どうぞ」と言われたので、私は最後だったんですが、発言させていただきました。その前にパネラーの先生が「日本のダイオキシン被害はカネミ油症があったが、大したことなく終わっている。」と説明されたんです。ですから「私は3月に行ってきたらこうでした。」ということをお伝えしました。「今現在の状況を御覧になっておっしゃっているのでしょうか。」と言ったら、「いえ、見ていません。」ということで、「それではぜひ調査に行ってみて下さい。現地は悲惨です。」と言いました。この発言を受けてパネラーの先生は「カネミ油症は非常に重い問題である。再調査が必要だと思っている」と言い直しました。8月にまた調査に行った時に、現地の方にその先生が調査に来たかどうか尋ねましたら、来たそうです。8月に行った時は閉ざされていた被害者の方々の気持ちもだいぶほぐれてきていました。公民館に泊ったのですが、3月の時のように閉ざされた感じではなくて、「とても遠いところをありがとうございます。」と言って私達を迎えてくれ、被害者の方たちが大勢でお料理を作ってくれました。原田先生の診察が非常に評判が良くて、8月は新しい方たちも来てくださったんです。

その新しい方の中には、油症発生当時にコーラルベビーで生まれたお子さんがいました。その方は男性で、黒い赤ちゃんで生まれて、お会いしたときには32歳になっていらっしゃいましたが、油症になってから家族は離散してしまって、つい最近になって裁判の経緯から返還金が請求されたことがもとで、お父さんが自分から命を絶たれて、自分は独りぼっちになってしまったとおっしゃっていました。この方はいまだに肌も歯茎もブドウ色をしているんです。抵抗力がないので大した仕事はできないそうです。それでも裁判の返還金を支払わなければいけないことになって、亡くなった祖母、父の分も含めて3人分を返さなければならない。働けないのに大金を返せという、こんな国があるのかと訴えていました。その時私は、こういう人たちが苦しんでいる時に私たちはいったい何をしていたのかと思いました。こういうことがあっていいのか、公害被害者の苦しみは国民が皆で分かち合わなければいけないのではないかと思います。

いました。それで、私たちができることは何ですかと言いましたら、自分たちは訴えたくても東京にも行けない、病院に行くにも具合が悪いのに長崎病院へ行くのに3日もかかるんですとおっしゃるんです。これは本当のことなんです。福江まで行くにもバスが無くて、1日かけて出かけて行っても診察時間はもう過ぎていて、その日は泊まって次の日に受診を申込んで診察してもらって、またその次の日に帰ってくるから、行くだけでも大変でただ苦しみ続けているだけだとおっしゃるのです。そのうえ、町の中では保険をたくさん使って村の財政を困難にする厄介者だということになっていたのです。そこで、こんな辺鄙な所では省庁に訴えることもできないとおっしゃったので、私たちはこちらに帰ってきてから「あの人たちに保険がきくようにして下さい。」と厚生省に行き交際しました。私が「なんでこんな事を放っておくんですか、ああいう困っている人たちの放っておくんですか。」と言うと、「どうしてこうなったんでしょうね。」と厚生省の人も言うんです。この問題は玉之浦の方で保険がきくようになるそうです。

私たちは今でも油症の方たちと「みんながんばりましょうね。私たちが東京でできることは何なの。何でも言って下さい。」と電話でやりとりしています。原田先生の親切な診察が効を奏したと本当に思うのですが、この方たちは私たちが行った後で郷ごとに6つのグループを作ったそうです。「5人でも6人でも立ち上がって、泣き寝入りしちゃ駄目よ。ちゃんと言うことは言って、治療費ももらえるようにしましょう。」と言いましたら、つい2、3日前の電話ですが、「石沢さん、6つのグループができました。もう年をとってしまったけれども、このままで泣き寝入りしたくない。皆さんが来てくれたことで勇気づけられました。私たちはやっといこうと思います。」とおっしゃっていました。さきほどの原田先生の「誰かが立ち上がることで救われる」というお話がありましたが、やはり公害がおきた時には健常者が、行ける人が行って助け合うべきじゃないかなとつくづく思いました。

私はこれからも玉之浦の人たちが幸せになるように、微力ですが少しでも活動していきたいと思っています。皆さんもよろしくお願いいたします。